

Unce upon a time in Utsunomiya

## 一枚の絵葉書から

石井敏夫コレクションより 第40回

招魂社(中央)と下之宮(右下)があった荒尾崎の小山。手前はパンパ仲見世



# 宇都宮招魂社

かつて二荒山一帯は、釣天井伝説で知られる本多正純が一六二〇(元和六)年に切り通しの道をつくるまで、その名の通り瓢箪型の小山を二つの峰からなる丘陵だった。現在、二荒山神社が鎮座する小山を白が峰、南に下って大通りを隔てたバルコあたりを荒尾崎と称し、摂社下之宮が祀られていた。

また荒尾崎は、一九四〇(昭和十五)年に遷座するまで下之宮より一段高いところに宇都宮招魂社が祀られていたことから招魂社とも呼ばれていた。今に残る絵葉書がそれである。パンパ仲見世から続く石段を昇り、招魂社

へ詣でた記憶がある人も多いことだろう。この小山は昭和二十年代後半まで残っていたが、いつの間にか市街地拡張により消えてしまった。今ではその痕跡すら見あたらない。

宇都宮招魂社は二八七二

(明治五)年十一月、元宇都宮藩知事戸田忠友が旧藩士や有志たちと図り、戊辰戦争で戦死した旧藩主戸田忠恕と藩兵九十六名の霊を祀ったのが始まりである。

一八七五(明治八)年四月には、戊辰戦争の戦没者は国家が祀るといふ太政官布達第六十七号により官祭招魂社へ発展。以後、西南の役、日清、日露戦争の戦没者を合祀する慰霊顕彰の社となった。翌年六月の明治天皇東北巡幸に際しては、ときの県令・鍋島幹が御使として金幣を奉納。毎年四月には、県主催による招魂祭が宇都宮城址を会場に、厳かに執り行われたという。

招魂社で忘れられないものに「およりの鐘」がある。「おより」とは、「おやすみになる」という意味。江戸時代から昭和の初期まで時を告げ続けた鐘で、宇都宮



鳥居脇に官祭宇都宮招魂社の標柱が建つ

氏が建立した東勝寺の梵鐘といわれる。家紋である三ツ巴が施されていた。太平洋戦争中、金属回収令により供出の危機に見舞われたが、由緒ある梵鐘であることが認められ、特に供出を免れたという逸話が残る。

宇都宮招魂社は、一九三九(昭和十四)年内務省令第十二号により社号を栃木県護国神社と改め、その翌年四月二十七日深夜、現在の陽西町に遷座された。「およりの鐘」は、田川河畔の宝蔵寺に移され、楼門にその姿を見ることができるといわれる。



宝蔵寺楼門の「およりの鐘」